

## りんご園で

## A Translation of Virginia Woolf's "In the Orchard" (1923)

坂本正雄 訳

translated by Masao SAKAMOTO

2009年10月1日受理

ミランダはりんご園の樹の下で長椅子に横になり、眠っていた。本が草の上に落ちていた。それでもミランダの指は「ここは、女の子がすぐに大笑いする世界の国のひとつ。」という文を指していた。まるでそこで眠りに落ちたかのようだ。指にはめたいいくつかのオペール、りんごの木の間を日の光が漏れて当たり、それらは緑に輝き、バラ色に輝き、それからまたオレンジに輝いた。それからそよ風吹けば、紫のドレスが茎先の花のように震えた。草がうなずいた。白い蝶が飛んできて、顔の上をあちこちとゆらいだ。

顔の上、一メートルほどにりんごがなっていた。突然かん高い叫び声がかきた。割れた真鍮製のどらみが激しく、不規則に、粗暴に打ち鳴らされたようだ。子供たちが声を合わせて九九を唱えていた。教師は途中で止め、叱り、それからまた子供たちは九九の表を唱えだした。でもこの叫び声はミランダの顔の上一メートルほどを行き、枝の間を通り、牛飼いの息子に届いた。息子は生け垣になっているブラックベリーを摘んでいた。ほんとうなら学校に行っているはずの時間だ。子供たちの声で息子はブラックベリーのとげに親指をかけ、けがをしてしまった。

つぎに聞こえてきたのは、寂しい叫び声。悲しく、いかにも人間の、それでいて獣のような。パーセリのじいさんがぐでんぐでんに酔っぱらっていた。

それからりんごの木のとっぺんについている葉っぱが、地面から十メートルほどのところ、空の青に小さな魚のように平べったく、物思わしげな、悲しい調べとともに音を鳴らした。その調べは教会のオルガン。『古今聖歌集』の一曲を奏でていた。音は漂い出て、ノハラツグミの群れがとてつもない速さで飛んで来て、ここ、そこで粉々に砕けた。ミランダは十メートルほど下で眠っていた。

それからりんご園でミランダが眠っている五十メートルほど上、りんごの木と梨の木の上で鐘が鈍い音を立てた。とぎれとぎれに、沈んで、教訓的な音を奏でた。というのも教区内の六人の女が産後の感謝として教会に礼拝し、教区牧師が天に感謝を返していたからだ。

その上では、鋭い音とともに教会塔の金の羽根が南から東へと向きを変えた。風向きが変わったのだ。ほかのすべてを見下ろして、森、草原、丘の上、りんご園でミランダが寝ている何マイルも上へと、風は物憂げに吹いた。辺り構わず、あてもなく、とどめるものに出会うこともなく、吹き続け、それから向きを変え、南へと吹いた。何マイルも下、針の目ほどの大きさの場所にミランダは起き上がり、大声を出した、「まあ、お茶に遅れるわ。」

ミランダはりんご園で眠っていた。あるいはたぶん眠っていなかったのだ。その唇はかすかに動いていた。まるで「ここは、女の子が……すぐに大笑いする……大笑いする……大笑いする……世界の国のひとつ。」と言っているようだ。それからミランダはほほえみ、体重のままに巨大な地面の上に身体を預けていった。大地が盛り上がり、わたしをその背に乗せて運んでいる。まるで木の葉のよう。ミランダは思った。それとも女王様かしら。(子供たちが九九を唱えていた。) それとも、ミランダは続けた、カモメがかん高く鳴っている崖の上に寝ているのかしら。ミランダは続けた。教師がこどもたちを叱り、ジミーの指の関節を血が出るまでこづいて、カモメが高く飛べば飛ぶだけ、海の中は深くまで見えるのだ、海の中。ミランダは繰り返した。指からは力が抜け、唇はそっと閉じられた。まるで海に浮かんでいるよう。それから頭の上で酔っぱらいの怒鳴り声が響いて、ミランダはえもいわれぬ恍惚とともに息を吸った。真っ赤な口の中に見えるざらざらの舌から、風の中から、教会の鐘から、キャベツの丸っこい緑の葉から、命が叫び出すのを聞いたような気がした。

ミランダは結婚式を挙げていた。『古今聖歌集』の曲をオルガンが奏でていた。六人の貧しい女たちの礼拝が終わった後、鐘が鳴った。時折、鈍い音が出て、地球自体が馬の蹄で揺れているように思った。馬はミランダめがけてギャロップしてきていた(ああ、待ってればいいんだわ、ミランダはため息をついた)、それから何もかもが、ある模様を描いて、自分の周りで、

自分を超え、自分に向かって、もう揺れはじめ、叫び、駆け、飛び跳ねた。

メアリーが木を切っている。ミランダは思った。ペアマンが牛を追っている。牧草地から荷馬車がやってくる。御者も。ミランダは、この田舎に男たち、荷馬車、鳥、それから御者が作る軌跡をたどった。それらは皆、ミランダの心臓の鼓動で消え、回り、過ぎ去っていくようだった。

空の上の方で、風が変わった。教会のてっぺん、<sup>きん</sup>金の矢羽根がきしんだ。ミランダは飛び起き、叫んだ。「ああ、お茶に遅れるわ。」

ミランダはりんご園で眠っていた。眠っていたのだろうか、眠っていなかったのだろうか。紫のドレスは二本のりんごの木の間に広がっていた。園には二十四本のりんごの木があった。少し斜めになったもの、まっすぐに幹がぐっと伸びたもの、それらは枝を広げ、枝

の先に赤や黄色の丸いしずくをつけていた。りんごの木一本一本には十分な広さが取ってあった。空がまさにその葉にふさわしいものであった。そよ風が吹くと、堀際の枝がしなり、また戻った。セクレイがこちらからあちらへと突っ切っていった。用心深く跳びはね、地面に落ちたりんごへとつぐみが近寄っていった。向こうの堀からすめが地面の草をかすめて飛んだ。上へと伸びるりんごの木はこうした動きに縛り付けられていた。すべてがりんご園の堀のなかに詰め込まれていた。何マイルも下では、地球は締め付けられていた。地表では揺らめく風に波を立てていた。藍色のりんご園の隅には紫の筋が走っていた。風が変わった。房になったりんごが高く跳ね上がり、牧草地の牛を二頭隠した(おお、お茶に遅れるわ。ミランダは叫んだ)、それからりんごはまた堀のところでまっすぐにぶら下がった。